光州虐殺事件を告発する

圧政に抗して市民は立ち上がった

大統領朴正熙射殺事件（昨年10月26日）以来、維新撤廃、新憲法制定、民主化を求める国民の声は、堰を切ったようにソウルをはじめ全土を覆った。

とくに光州では、30万市民が手に銃をとり全斗煥体制に抗して、祖国の青史に永遠に光り輝く闘争をくり広げた。（日誌参照）

これに対して韓国政府は、2万4千の戒厳軍を動員して前面から無差別攻撃を加え、徹底的に弾圧した。その結果、1千名以上の死者と1万をこえる負傷者を出したと伝えられる。光州は、まさに市民の鮮血で染まった。

わたしたちは、異国の地・日本にあって、いたたまれぬ焦燥感にかられながら、事態の推移を見守ってきた。

わたしたちは、勇敢で思慮深い息子や娘を持ったことを、心から誇りに思う。

と同時に、あまりにも年若くして民族の祭壇に身を捧げた無数の若者たちと、大地を叩いて慟哭する母親たちの気持に思いをはせるとき、耐えがたい怒りにかられる。

第2、第3の光州が、歴史と正義の名において審判を下す日がやってくるであろう。

光州事件の犠牲者を心から悼み、ここに写真集を出版するものである。

1980年6月20日

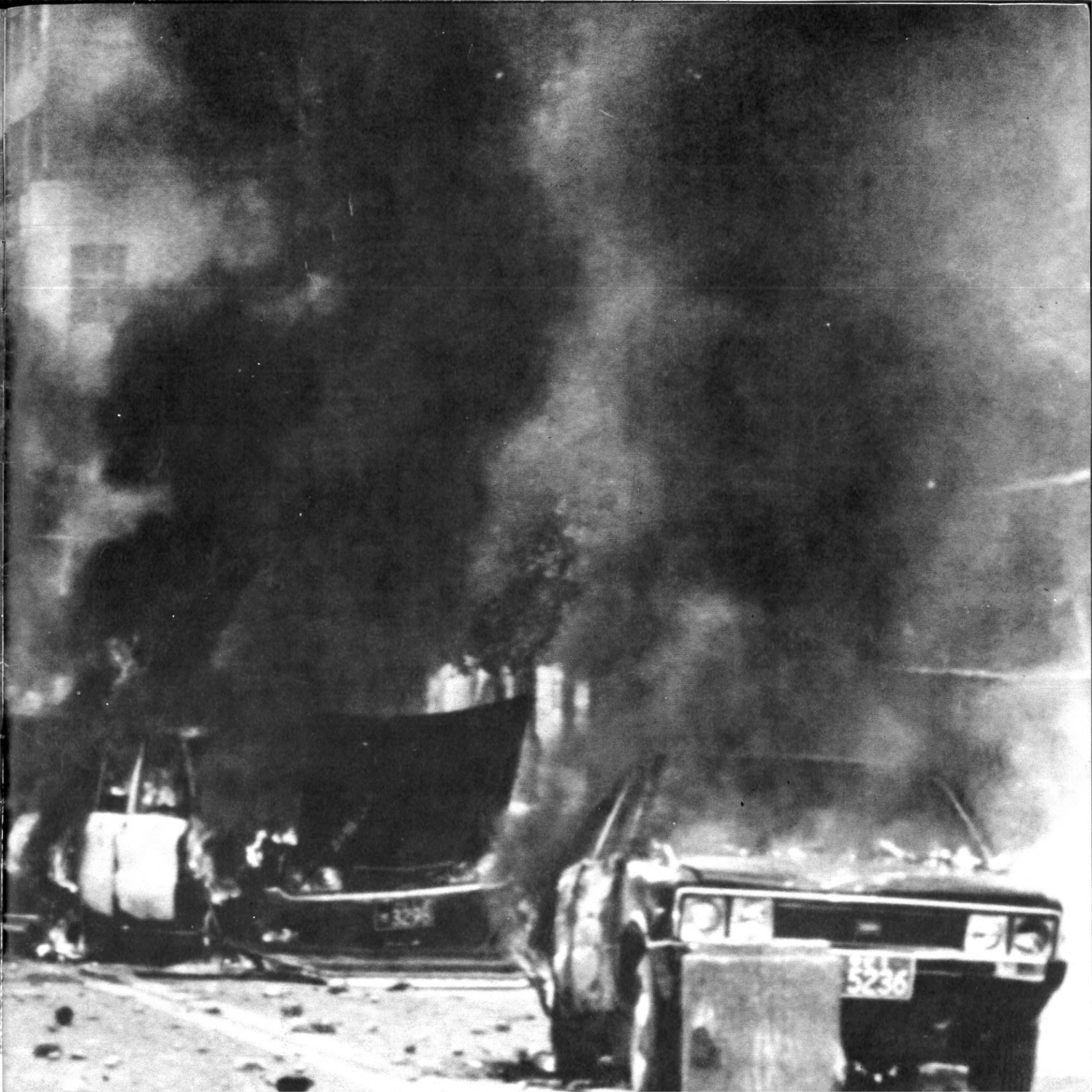
光州虐殺事件を告発する会

太極旗に包まれた遺体（5月22日）

〝全斗煥をやつざきにしろ！〞のスローガンを車の前に

若者たちは　声のかぎり叫ぶ
〝座して死を待つより　ともに立ち上れ〟

燃える車（5月19日）


5236

市民たちは石をもって抵抗（5月19日）

◀催涙弾の白煙たちこめる中
青年たちは進む

怒りの若者（5月23日）

たち上がった市民（5月23日）

無差別銃撃で子供も殺され

光州女性市民のレポート

韓国戒厳軍の無差別虐殺で、血の海と化した光州市のある女性市民が外国人記者に託した英文のレポートが日本で公表された。レポートの日付は五月二十三日午後六時で、全斗煥が送り込んだ空てい部隊を「吸血鬼集団」と呼び、その残虐行為を生々しくつづっている。以下要旨を掲載する

親愛なる外国特派員のみなさん。

私は現在の光州市における危機的情況について、私のつたないレポートを読まれんことをみなさんに切にお願いします。

私は、光州の一女性市民です。私は、戒厳当局によって逮捕されることをもいとわない決心でいますが、どうか私の安全も考慮して下さるようお願いします。

まずはじめに強調したいことは、私の家族はだれも朴政権および継承者に危害を加えられたことがないということです。したがって、私の言葉は客観的であり真実であることを信じて下さい。

どうかこの手紙を信じて下さい。五月十八、十九、二十日の空てい部隊の野蛮な行為は当局が発表したものより、はるかにひどいものでした。

十九日の朝私の父は、空てい部隊の兵士数人が二階建ての屋根から負傷した人々を投げ殺しているのを目撃しています。同じころ私の母が、若いデモ参加者が棍棒で頭を叩き割られ、脳ずいが露出してしまった場面を目撃しています。しかしこれらは戒厳軍の残酷な行為のなかでも比較的ましなほうです。この三日間の空てい部隊の行為があまりにも残酷で非人間的なゆえに、彼らが長い期間かけて洗脳され、数日間飢餓状態におかれたままアルコールと麻薬だけを飲まされたことによってなされた行為としか理解できません。

私は、老人たちが「このような残虐な行為は一九五〇年の朝鮮戦争のときにもなかった」と発言したことが、市民感情を奮起させたのだと思います。私たちは吸血鬼集団ともいえる空てい部隊が、殺した数多くの市民の死体を焼いたりしてかくしたと信じています。

現在の光州が学生と市民勢力によって占拠されるようになった決定的なきっかけは、学生のデモ隊を運んだという理由で四人の同僚を殺された職業運転手の一団が怒り、車で攻撃したことに端を発しています。

私は二十日の夜からなされた道庁前の抗争を目撃しています。二十一日の午後一時ごろ、空てい部隊の無差別銃撃がはじまりました。十歳ぐらいの子どもが撃ち殺されました。私は、これを警察署の路地で目撃しました。また、クンナムホテルのコックは働いているところを殺されました。

私は道庁舎前広場での市民集会、示威運動に二十二日の午後七時十分まで参加しました。私は学生指導者らの純粋さにショックを受けました。私は自由と民主主義の若き化身である彼らを誇りに思います。

抵抗運動の主要勢力は、徹頭徹尾、完全に理性的でした。例えば、市の中央警察署は、少なくとも三度にわたって戦車が市民を制圧するためにやって来るという極度の興奮状態のなかでさえ攻撃されませんでした。MBC放送（文化放送）局が、原因不明の火事に襲われたときに、学生たちが消火に努めていたことを、私の妹が目撃しています。

今、私たち光州市民は誇りに思っています。しかし同時に私たちは恐ろしい孤立感を味わっています。正義の学生たちは、夜がしのび寄ると寂しさを隠すことができないようにみえます。これは、おもにマスコミの海外報道が、私たちの期待以上に弱く、皮相的なものでしかないからです。ソウルからの放送は虚偽と不誠実さに満ちているので私たちを驚かせました。もし報道がいまわしい検閲を受けなかったならば、私たちのたたかいはすでに成功を収めていたでありましょう。私たちは一九六〇年の四・一九革命とは比較にならない悪状況のもとにさらされています。私は、いまだかつて市民の生存と自由のための抵抗がこのように不当なあつかいを受けたということを知りません。全斗煥は吸血鬼かさもなくば、少なくとも異常な性格の持ち主だとしか思えません。もしそうでないとするならば、あのような吸血鬼集団をどうしてあやつることができるのでしょうか。私たちは全斗煥の生きる道は、海外逃亡か、さもなければ弾圧政策を強化して光州市一帯の市民の大虐殺を行なう他はないであろうということを知っています。

私たちが、韓米連合軍司令部司令官に、この悲劇について実際的な責任があるというならば、道理にあわないでしょうか。

それは、みなさんも御承知のように、この国では彼が完全な統帥権をもっているからです。

もし、この地域の平和と秩序が不安定で、全斗煥の統治下にあるかぎり、光州の全市民は憤怒に燃え、そして犠牲者に対する罪悪感にさいなまれながら生活しなければならないでしょう。そうなれば、大韓民国は崩壊するでしょう。考えるだけでも恐しい。

私たちに切実に求められているのは、私たちの悲劇、現在の危機を知らせることです。私たちの自由は、私たち自身にかかっているということを、私たちは知っています。私たちは、私たちのたたかう青年たちのためにSOSを数千回も発します。

ソウルや他の地域の数多くの学生が、私たちの光州を包囲している戒厳軍を突破しようとして射殺されています。そして、私たちは死んで行く兵士も私たちの同胞だということを忘れてはいません。一握りにも満たない反逆者によってどれだけ大きな悲劇がもたらされていることでしょう。

記者のみなさん、感謝します。

無抵抗の市民に　なおも棍棒が…（5月20日）

彼らの手で彼らの車で燦らんとはためいていた。

空てい部隊の後退

空てい部隊が撤収したというわさが聞かれた。現役の大尉が直接伝えるところによると、空てい部隊の中に全羅南道出身者が一人内務班に加わっていたことがわざわいしたのだという。市民を無差別虐殺する奴らのやり方に憤慨した兵がそばにいた五人を射殺し、自殺したというのだ。混乱をきたした空てい特攻隊は郊外に一旦後退し、一般戒厳軍が要所を掌握したままデモの群衆に向けてひきつづき無差別射撃を行なってきた。

〝戦って死のう〟

アスファルトの上にねばりついているあの幼き者の血、道ばたに裸のまま放置された幼い少年たちの遺体を見て、ただ黙って見物していられようか。恐怖と戦慄の都市、破壊と殺人が乱舞する街、火の柱がいたるところで天を覆い一切の放送は中断され、ニュースが庶断された暗黒の孤島。しかし市民たちの胸は熱かった。

民主守護のために身を棒げると起ち上がった若人の憤怒にふきあがる涙、血に染った胸。彼らは頭に血書をしたためた鉢巻をまき、のどが裂けんばかりに叫ぶ。車に乗れなかった市民は我先に握り飯をつくり、飲料水を持って来た。食べ物、飲み物を与えるのに惜びいものは何もなかった。ある店の七十歳位の老婆は陳列してあった食物を全部そのままかき集めた。卵、パン、コーラ、牛乳、ジュースなど、あるもの全部をあげたいようだった。惜しいものはなかった。その箱を老婆は持ち上げられなかった。私はそれを持ち上げ、走っている車を止め、車の中に押し入れた。食べ物を準備できなかった婦人たちは一様に水桶を持って来て彼らの顔を拭いてやり、水を口にそそいでやっている。一心不乱に疾走する車の間隙で、危険をもかえりみず、皆ともに生命を捧げる血と愛の闘争であった。薬とドリンク剤を持ってきた薬剤師たち、全身の魂をこめて、拍手と激励を送る人波、人波。

30万の巨大な人波

〈22日〉 戒厳軍の銃口からはふたたび火が吹きはじめた。装甲車の上でスローガンを叫んでいた中学三年ぐらいの少年が、額と腹部から赤い血を吐きながら倒れた。群衆に向って降りそそぐ実弾は、雨あられのように降りしきった。私の前で指揮していた青年が「アイグ！」というひと声を残して倒れた。担架を用意できなかったデモ群衆は、背中に背負ったり、角材で担架をつくって患者や屍を運んだ。

銃弾を避けようと退却する群衆に押され、ある路地を曲がったところ、そこにはもうひとつの大きな不幸が民衆を待っていた。広さ三mの狭い路地へ数千人が押し寄せたため、押されて踏まれ倒れた人、その上にまた覆いかぶさって踏みつけられ、五十数人の死傷者を出してしまった。幸いにも折れたり引き裂かれたりしたところはないにしても、私もこれで終わりだと覚悟して目をつむったが、奇跡的に生きていた。

あふれる病院

「市民の皆さん！ 血を下さい。献血をして下さい。血がなくて患者が死んでいきます」。学生たちはマイクをとおして声をかぎりに献血を訴えてきた。あちこちで献血しようという男女が進み出た。「献血車」と血で書かれた救急車に乗せられて赤十字病院に到着した。病院に入ると、血なまぐさい臭気で吐き気をもよおした。あちこちの病院の廊下や病室は患者でいっぱいになった。どこにも座って採血する空間がなかった。

銃を手にとり対抗

〈23日〉 光州市内のすべての戒厳軍は、外郭地に退却。道庁は市民が占拠した。デモ群衆は三十一（予備）師団、和順、松汀里（先山郡）、羅州、咸平などで武器を略奪してきた。銃が四千余丁、実弾が約五万発、手榴弾、ダイナマイトなど、十分に戒厳軍とたたかえるだけの武器を確保したということだ。重武装した軍人たちと対抗しなければ、犬死にする者の数ばかり増やす無謀をさとり、彼らは作戦を変えたのである。

いまや彼らの手には角材と工具シャベルと鶴はしのかわりにカービン銃、LMG小銃、手榴弾が握られた。

家に帰っていた子どもたちは午後にはふたたびもどってきた。

明け方の鉄道に並んでいた死体の山を見てびっくりしてもどってきたというのだ。市外へ抜け出ようとした群衆たちが戒厳軍の銃弾に撃たれて倒れてしまったのである。

地下室に475の死体

新任内閣の総理一団が光州に来るという報道を聞き、市民たちは総理を迎えるためふたたび道庁に集結した。

すでに戒厳軍が退却した道庁は廃虚の都市、軍靴のように殺伐とした敗戦の都市の姿を露にした。数十万の群衆は道庁前で熱い陽射しと渇症も何のその、五時間も座って待った。

市民たちは道庁の地下室から死体を取りだし、広場に積みはじめた。忍耐と自制でもって発砲を抑えるため数多い軍警の犠牲を払ったという政府の報道がどんなにふざけた流言蜚語なのかを総理の前にはっきり見せてやろうというつもりだった。

道庁の地下室には、顔を見分けられないほど火炎放射器に焦がされたり、裂かれたりした死体が四百七十五体も放置されているのを見た市民たちは、ふたたび憤りで歯ぎしりした。

暴徒ではない

総理は、市民と会って対話しようという約束を無惨に反古にし、戒厳分所長の事態の報告だけを受けて、事態収拾の特使は就任後はじめての出張に不渡りを出して姿を消した。「治安不在、無法の都市」「暴徒の牛耳る都市」という名を残して。

怒りにたえられず腹から内臓がとびだしているにもかかわらず、ある青年は血で「自由という木は血を吸って育つ」と書いていた。

〈24日〉 高空飛行してバラまくビラは、形は「呼訴文」だが、内容は欺瞞と術策でかためられた脅迫だった。

放送内容もかえって市民の感情を激化させるだけで鎮めさせることはできなかった。

「政府は忍耐と自制で発砲できず、数多くの軍警が犠牲となりました。市民の皆さんは固定間諜や暴徒らに幻惑されています。一日も早く理性を取り戻し、家へ帰ってください。暴徒らと分離してください。何人かの負傷者はよく治療しています」というなど、図式化され硬直した嘘で市民をなだめすかそうとする「呼訴文」を握った市民たちは憤慨せざるを得なかった。

民衆はだまされぬ

現役将校たちも怒りをおさえきれず、身震いしているこのむごたらしい事態がもたらした人命被害は、デモ群衆の車両を指揮していた某大学生が伝えるところによると射殺された人は千二百人、交通事故・銃剣などにより死んだ人は八百余人、合わせて二千余人をこえるという。病院をうめている負傷者が血と医薬品が足りず死んでいくという。その数字はさらに増えていくものと予測されており、ある宗教団体では死傷者数を二十数万人と推算しているという。

目をとじれば
鮮かにあがる
引き裂かれた旗
頬には熱い涙が
流れてもあふれおつ

●ある目撃者の証言●引き裂かれた旗

日本カトリック正義と平和協議会(会長・森田宗一)が、光州事件当時、現場にいた韓国人キリスト教徒の手記を発表した。
五月十九日に光州入りした筆者が、二十四日に現地を脱出するまでの六日間に目撃した光州市民一体となってのたたかいと、これに対する戒厳軍の想像を絶する野蛮な無差別弾圧は、とても正常な神経をもった人間の行為とは思えない。
手記は、テープ5時間分の長文のものであるが、本会が紙面の都合上、要約した。中見出しも本会がつけたものである。

手あたり次第の虐殺

〈5月19、20日〉デモをする学生と見物していた市民は、避けるいとまもなく蜂の群のように飛来した空てい隊の包囲網にかかり、死力をつくして逃げた。

まさか良民を殺しはすまいという単純で愚かな信頼感だけで中心街に近づいていた私は、一旦は生きなければというもっとも基本的な本能の命ずるまま必死に逃げた。後を追って来る銃剣のギョッとする触感を肩に意識しながら、あるビルディングの中に夢中で飛びこんだ。ありがたいことに先に来ていた一人がすぐにシャッターを降ろしてくれたので鉄槌で頭がい骨を割られ、帯剣によって胸が突き裂かれる惨劇を免れることができた。

生死の確認もせず

鼓膜を破る銃声、鋭利な帯剣、鉄棒を振りまわす音、誰かの生命が絶える悲鳴は地獄の修羅場を雄弁に物語っていた。老若男女、学生、一般人の区別なく手当り次第に殴り、刺し、打ちのめした。

この時、私のアングルは恐ろしい現場をとらえた。避難もできずにいた七十歳位のおじいさんの後頭部に空てい兵の鉄槌が打ち降ろされるや、口と頭からは噴水のような鮮血がほとばしり出て、老人は悲鳴をあげるひまもなくバタッと倒れた。

二人の空てい兵に犬みたいに引きずられてきた女の人は臨月に近い妊産婦であった。「このアマ、袋に入っているのは何だ」私は何を問うているのか分からず、彼女の手を見つめたが、手には何もなく、何かを入れるような袋も見えなかった。

「このアマ！わからんのか？男か、女か？」横にいた奴がせき立てているのを見て私ははじめて何をいっているのかが分かった。女の人のいっている声は聴き取れなかったが、何なのか分らないという素ぶりであった。「それじゃわからせてやろう」彼女が抵抗する間もなく着物をつかむや引き裂いた。ワンピースが引き裂かれ肌が露になった。空てい兵は帯剣で彼女の腹をぐさっと刺した。えぐって刺したのかすぐに腸がとび出した。奴らはふたたびその彼女の下腹を刺して胎児を引き出して、まだ息をしている彼女に胎児を投げつけた。

とうてい信じられず、あり得ようのないこの凄惨な現場を目撃していた人々は皆同じように首をふり、身震いしながら歯ぎしりした。

横に立っていたおじさんの話によれば、まるで汚物をすてるようにかますのなかに押し込め、清掃車に投げ込んでいったという。

目をおおう惨劇

いつの間に他の場所に避難したのか、私の横にいた人たちは消え去っていた。戒厳軍が押し寄せ、通り過ぎた後には血の跡と、破片と、汚物と、憤怒が乱舞する。帯剣と鉄棒を避け、群衆は路地裏、喫茶店、食堂、店、建物のどこへでも飛び込んだ。血を吸うのに血眼になって、奴らは誰ともなく捕えては刺し、殴り、その場で即死させたのである。

ある路地を抜け、大通りの前で私はびくっと立ちどまった。ほとんど反射的に身を空箱の後に隠した。まことに恐ろしく悲惨きわまりない、歴史が生じて以来どんな虐殺現場においても決して行なわれたことのない、そのような惨劇をまたもや見なければならなかった。はたして奴らが同じ血を分けたわが民族だろうか。同じ言語を使用し、同じ国籍を持ったわが国の人間だというのか。女子大生らしい三人の娘さんが空てい兵によって徐々に裸にされていた。ブラジャーとパンティまで全部引き裂き、そのなかでもっとも悪どい顔をした空てい兵が軍靴で娘の尻を蹴とばしながら「早く消え失せろ！このアマが、今がどんな時だと思ってデモなんかやらかして騒ぐのか」と、怒り狂う狼みたいにいった。しかしどうしたことか娘たちは逃げるのではなく、胸をだいて道ばたに座り込んでしまった。この時一人が叫んだ。「こいつら命が惜しくないようだ。それなら仕方ない」その瞬間、娘たちの背中には帯剣が同じように刺され、噴水のように血がほとばしった。倒れた娘たちの胸に帯剣で×印を書き、生死の確認もしないで清掃車に投げ込んでしまった。闇から闇に葬るのか、火葬にするのか、それは知る由もない。

全市民が反撃

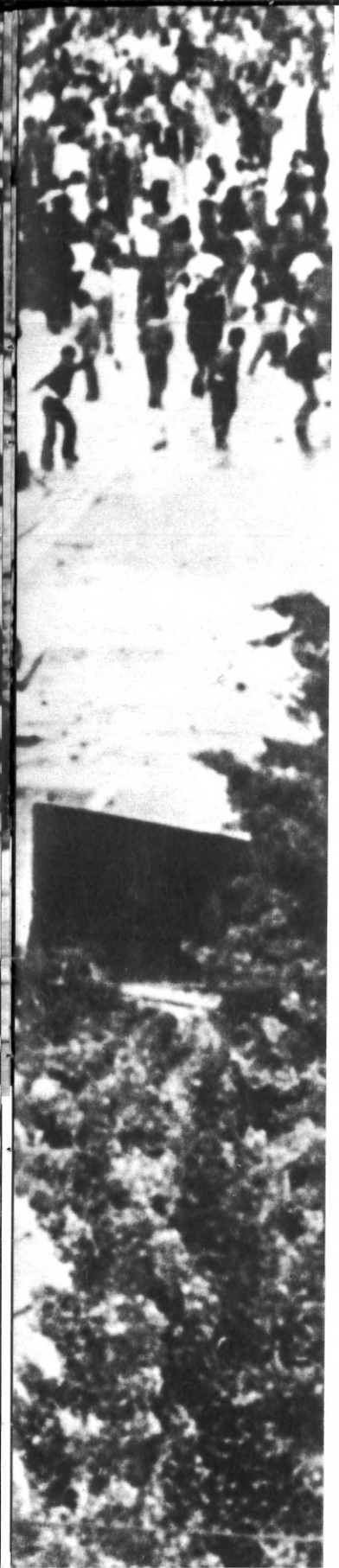
この時であった。逃げまわっていた市民たちの喊声がさらに荒々しくなり、興奮は絶頂に達し始めた。誰かの口から「市民たちよ、皆起ち上がろう。私たちの息子が皆死んでしまいます。工具でも鶴はしでも手当りしだいに持ってきてたたかおう。」。ワァーという喊声とともに市民が集まり始め、またたく間にある木材所の角材をそっくり持ってきたのか、今までヤジ馬で逃げ廻っていた民衆が逆にたたかう姿勢に急変していき事態は悪化していった。

弟と従兄弟の生死を確認したのは夜十一時過ぎであった。

〈21日〉すでに都心のアスファルトは鮮血で染まり、戒厳軍の残虐な無差別発砲に夜を徹した示威群衆は五百人以上が血を吐いて倒れたと、高校三年生の甥が夜をあかして奴らに火炎ビンを投げつけて抵抗したすえ見るも無惨な格好で帰ってきて教えてくれた。私が犬死にをしてはならないというと「友だちが死に兄弟たちが皆死んでいくのに自分だけ生き残るため隠れていろというのですか」興奮を押えることができず私にくってかかるので何もいえなくなってしまった。

血のプラカード

血を見た学生たちと市民の心は憤怒と怨みで興奮の極に達したのであり、市内の運転手という運転手がそれぞれ車に乗ってきて、デモの群衆を乗せてカーパレードをくり広げ始める。街路にはどこに行っても切れ目なく市民が出てデモの群衆に拍手と歓呼で激励を送り、若人は我先に車に乗った。高速バス、市内バス、軍用トラック、装甲車、ブルドーザー、霊柩車、将軍専用防弾車、絵でも見られない様々な車両数百台が動員されたのであり、アジア自動車工場の整備員数百人が飛び出て故障した車両を整備しふたたび動かした。列をつくるデモの車両にガソリンを供給するのを惜しまなかった。車両ごとに血で書かれたプラカードと、乾いていない鮮血が流れおちる車体のスローガンが市民の心を揺り動かした。「殺人鬼、全斗煥をたたき殺せ」「崔圭夏と申鉉碻を追放せよ」「金大中氏を釈放せよ」「戒厳令を撤廃せよ」という鮮血で書いたプラカードと旗は、



◀黒煙の中市民たちは立ち上る

街に出よう！（5月23日）

軍用トラックを奪い　戒厳軍にたち向う市民と学生
機動隊のヘルメットをかぶった青年の顔にはまだあどけなさが残る（5月24日）▼

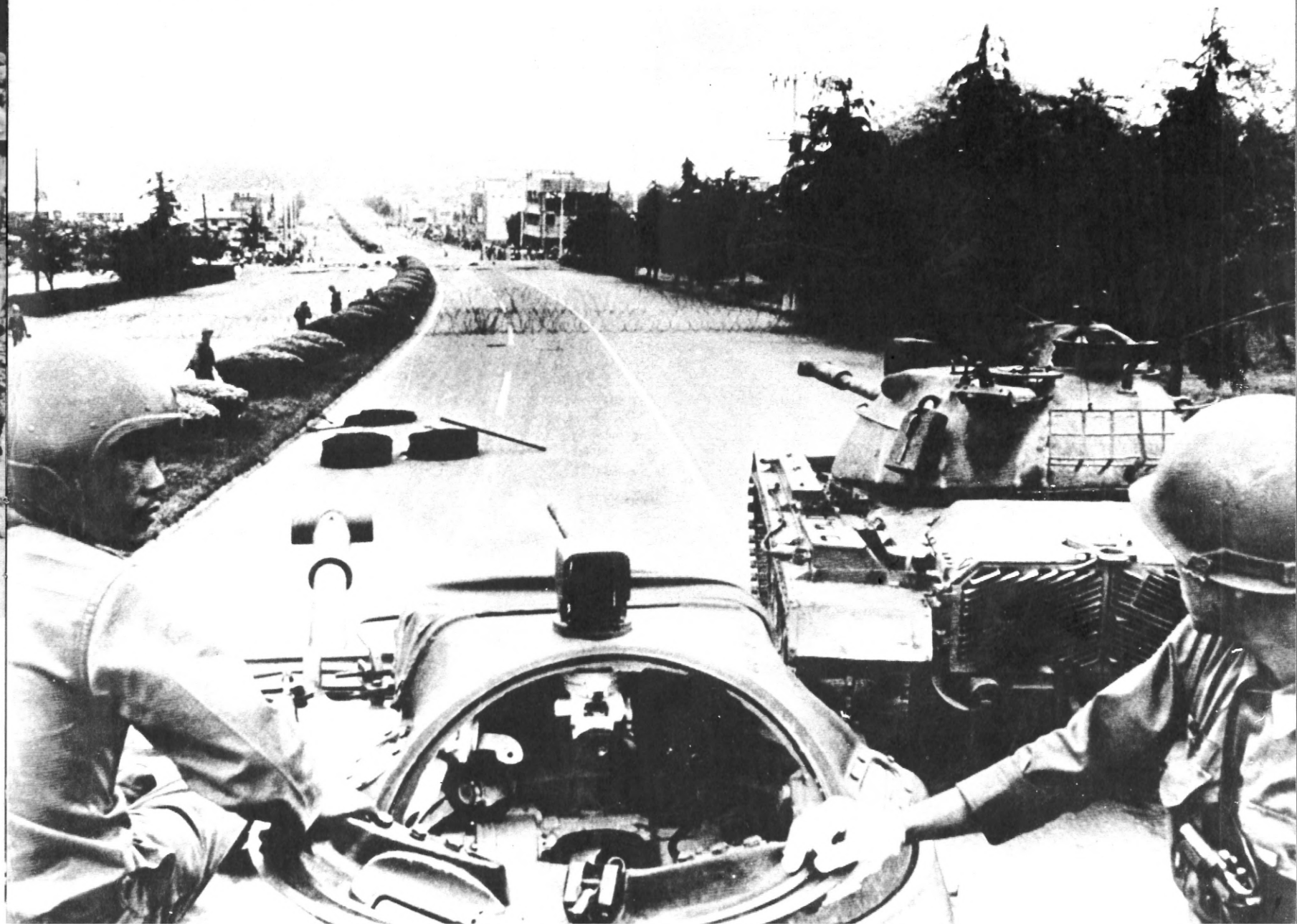
市民は　暴虐非道の戒厳軍の武力に　武力で立ち上る（5月23日）

光州市主要道路は　市民のバリケードで埋められた（５月21日）

友は倒れぬ

空てい隊（5月23日）

光州郊外　市への入口を封鎖（5月24日）



催涙弾の白煙は　機動隊の孤立を浮きぼりにしている

惨状！慟哭！恨！

後手にしばられ連行される若者
（5月27日）

80年代
400萬의 和合

道庁にたてこもった若者たちも
圧倒的な武力の前に力つきる（5月27日）

を打ち砕いて殺した。

道民たちよ！　この痛恨すべき血のにじむ光州市民の憤りを知っているか？

三千万愛国同胞よ！　理不尽に殺された者の声が聞こえぬか？

民主軍隊よ！　答えよ！　さあ、吸血鬼、殺人魔の全斗煥と維新残党どもを殺すべきか？　さもなくば民主を叫ぶ純朴な愛国市民を殺すべきなのかを？　光州の警察よ！　答えよ！　われわれの息子、娘たちが皆殺しにされても、われわれに催涙弾を打ち込むつもりなのか？　さもなくば民主市民の側に立ち、無惨に殺されゆく愛国市民を助けるべきなのかを！

凄絶な恐怖の光州、血で彩られたアスファルトの上に、無惨に殺された死体の山の上にわれわれは死を覚悟して一堂に参集した。

いまや、われわれは何を安じ、何を恐れようか！

立ちあがれ！　立ちあがれ！　立ちあがれ！　われわれには憤怒と憎しみと救国民主の一念があるだけである。

全国の市民よ！　石と棍棒という棍棒を手にして立ちあがれ！

全国の勤労者よ！　あらゆる工具を手に取って立ちあがれ！

全国の農民よ！　鋤と鍬を手にして立ちあがれ！

三千万愛国同胞よ！　すべて立ちあがろう！　そしてこの地で決して放棄してはならない、ふたたび奪われてはならない輝かしい民族の花を咲かせよ！

勝利の日まで全道民は武器をもって毎日正午を期して、全南道庁前広場、光州公園、錦南路、新駅光州へ集まろう！

一九八〇年五月二十一日

全南民主民族統一のための
国民連合会
民主青年民主救国総学生連盟

（五月二十一日、光州市内でまかれたビラから）

光州市の新聞社で（5月27日朝）

80万民主市民たちよ総決起せよ

民主守護全南道民総決起文

四百万全南道民よ、総決起せよ！

全南の愛国青年たちよ、総決起せよ！

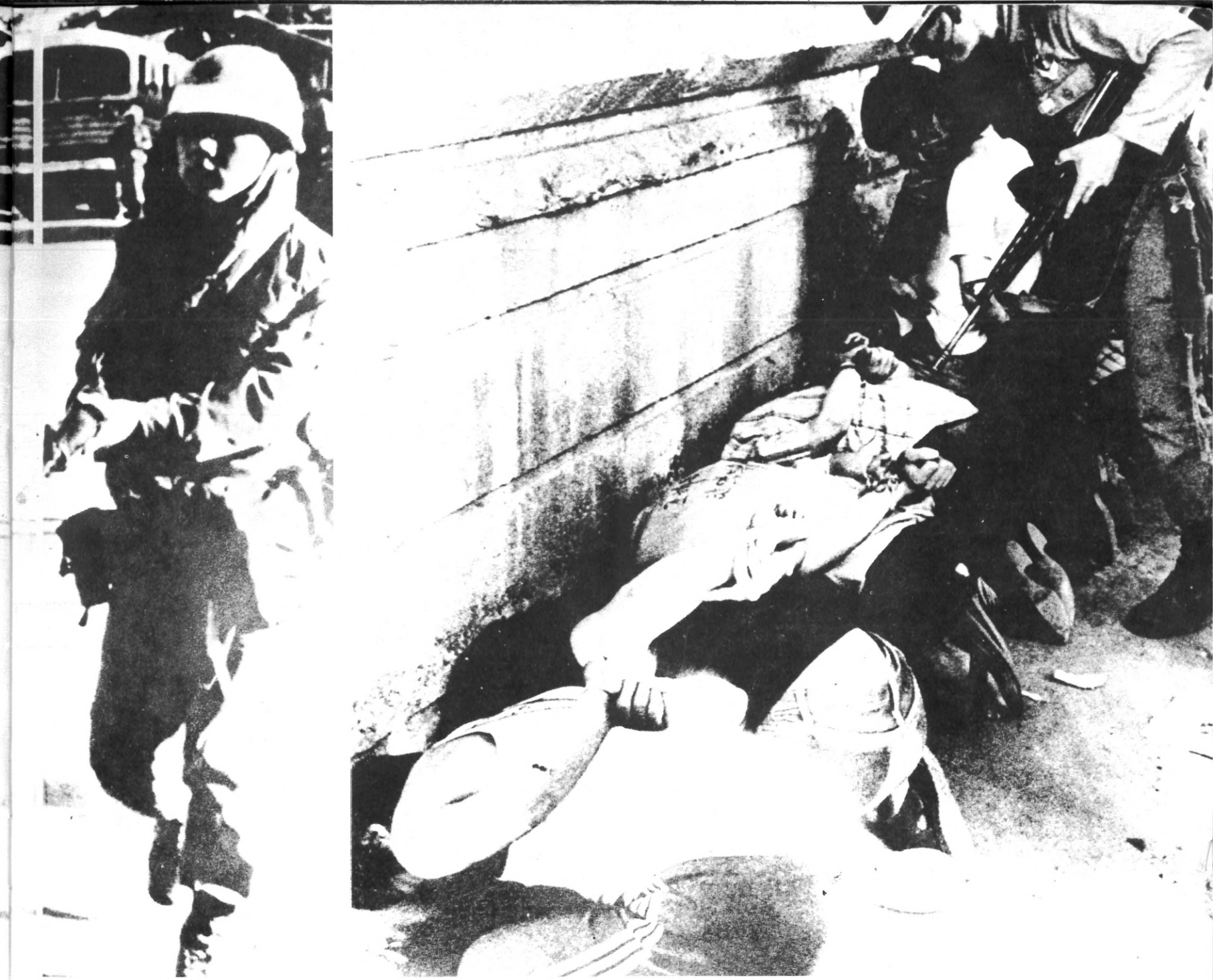
全南の愛国勤労者たちよ、総決起せよ！

全南の愛国農民たちよ、総決起せよ！

八十万、民主市民たちよ、総決起せよ！

最後のひとりまで、最後の一刻まで、たたかいぬき、あの憎むべき殺人鬼全斗煥を、凶悪な国民の背信者、維新残党どもをこなごなに引き裂いて、デモをして殺されたわれわれの息子、娘たちの恨みを晴らしてやろう！　極悪非道な殺人鬼全斗煥の私兵、特戦団（空挺部隊）は、われわれの若い学生たちを銃剣で刺し、腹を引き裂いて殺し、娘たちの耳をそぎ、婦女子を素っ裸にして腹を切り裂いて内臓を道ばたに投げ出し、はなはだしくは幼い子どもを銃床で頭部

このあどけない少年になんの罪があろうか



とらえられ

連行される学生　市民

そうとするのか？事態収拾のためには、軍兵力の動員が不可避だと彼らは判断したのかも知れないが、これは収拾どころか、事態をより悪化させるだけである。民主化をすみやかに達成させるための諸般の措置だけが、事態収拾の唯一の道だということが、なぜ、わからないのか。米国が本当の市民の叫び、学生たちの絶叫が何であるかについて、もう少し謙虚に耳をかたむけるよう、求めるものである。

一九八〇年五月二十四日

民主主義と民族統一のための国民連合共同議長　尹普潽

咸錫憲

李姫鎬（金大中議長を代理）

同族相はむ悲劇を招いたのは誰か！

「民主主義と民族統一のための国民連合」が発表した時局声明書

去る五月一七日の非常戒厳令拡大措置と、民主人士たちの拘束、そして光州市民の抗議デモと、これにたいする空輸特戦団の無差別良民殺傷行為は、すでにわが国の国運を、取り返しのつかない破局の境地にまで至らしめている。

全斗煥一個人の破廉恥な政権野欲と、維新妄執が、わが祖国全体を破滅させる、未曽有の国難をひき起こしているのである。今、全国民は、全斗煥の五・一七不法クーデターと光州市民虐殺にたいし燃え上がる憤怒の炎を押えることができないでいる。全斗煥一個人のために、どうして、同胞が同胞の胸に銃を向けねばならず、祖国の運命を百尺竿頭の危険にさらせようか。

「民主主義と民族統一のための国民連合」は、当面のこのような国難を打開するために、次の事項を、その収拾策として提示するものである。

① 全斗煥は、直ちにあらゆる公職から退かねばならない。

② 金大中氏など、すべての民主人士を直ちに釈放しなければならない。

③ 非常戒厳令は　解除されねばならない。

④ 政府は、民主化政治日程を、すみやかに公表しなければならない。

⑤ 軍と警察は　厳正中立を守らねばならない。

以上、五項目の現時局収拾方案を、崔圭夏政府が、即刻、実行に移すことを、本「国民連合」は国民の名で、厳粛に要求する。朴忠勲国務総理代理のテレビ会見は、新たに、国民を失望、憤慨させているばかりだ。一時的なび縫策や虚偽宣伝だけでは、決して事態を収拾することができないことを、当局は深く認識せねばならない。

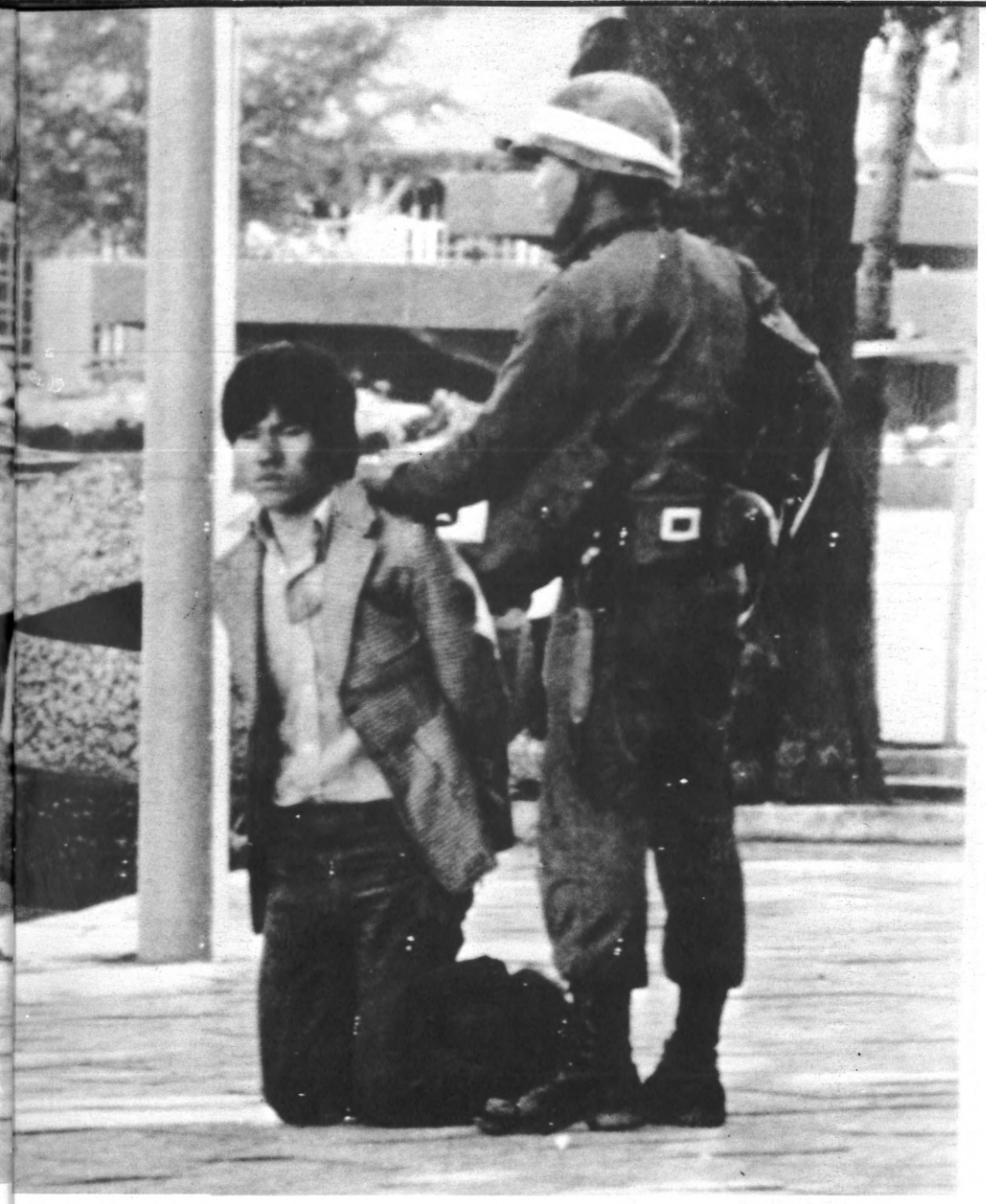
今、刻こくと民族の悲劇が、国家の破滅が近づいている。事態収拾には、いささかの猶予も、いかなるび縫策も、あってはならないはずだ。

言論人に告ぐ

これ以上、歪曲報道をしてはならない。検閲が、当局が、それほどまでに恐しいのなら、むしろ筆を折りたまえ。歴史の審判に怯えてでなく、自らの兄弟、自らの家族、自らの祖国のために、言論人よ、今からでも敢然と立ち上がり闘え。言論の真の使命を全うせよ。これ以上、罪を犯してはならない。

最後に、米国に警告する

四・一九革命当時、米国がわれわれの民主化闘争にどのような寄与をしたか、よく記憶にとどめているわが国民は、最近一連の米国の措置にたいして、深い失望と憤怒を禁じえないでいる。なぜ、全斗煥に手を貸し無この良民を殺傷するのか？なぜ、イランでの惨めな政策の失敗を、再び韓国でくり返



若者とみれば無差別に逮捕。ひざまづかされた若者の胸によぎるものは…（5月27日）

戒厳軍の暴行により倒れる市民（5月19日）

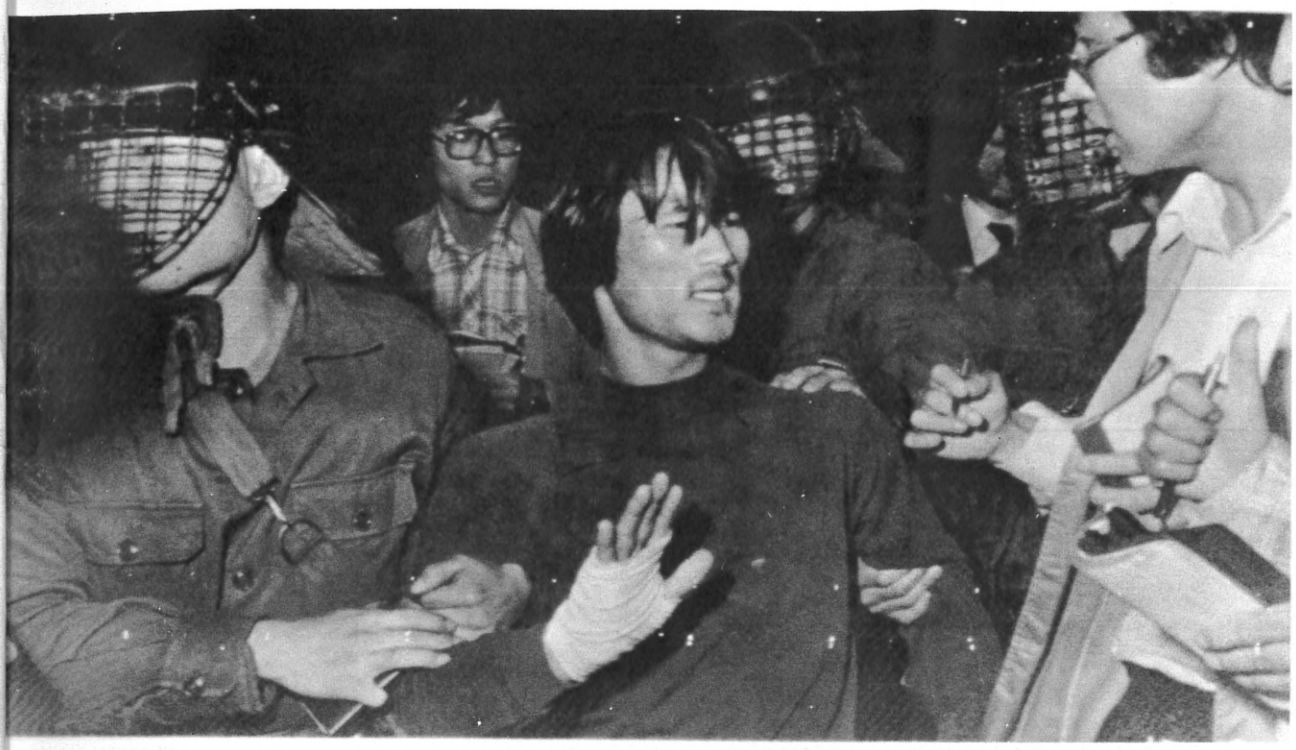
(写真上)普段着姿で街にでた若者たちも手あたり次第に，ホールドアップ （5月27日）

(写真下)無抵抗の若者に，空てい隊員の暴行が続く（5月20日）

光州市の新聞社で（5月27日朝）

光州の戦いを支持する

日本キリスト者が声明



機動隊に連行される学生リーダーのこのき然たる姿たぎる憂国の至情（5月17日ソウル）

死体と空てい隊（5月27日）

昨年10月の朴大統領射殺事件以来、韓国の民衆は長年の願いである民主化実現への曙光を見ました。しかしその後7ヵ月にわたる韓国の情勢は、この民衆の願いを裏切って、崔圭夏大統領と全斗煥国軍保安司令官の一体のもと、朴政権の時代を上まわる政治の反民主化と弾圧が続いています。

去る5月初旬以来、韓国全土で起った市民・学生のデモは、戒厳令下でのこの状態に対する民衆の激しい怒りが現われたものです。

特に18日金大中氏や多数の民主人士の不当逮捕連行への抗議にはじまった光州の市民、学生のデモは、一部に「暴挙」と言われていますが、これは、「韓国民主化キリスト者同志会」（金在俊委員長）も言っているように、「軍隊の暴挙が学生や市民を刺激して自分たちも武装して自衛せざるを得なかった」のであり、民衆の批判が頂点に達した義挙と言えます。私たちとしても、この市民・学生の軍部に対する抵抗の正当性を確認し、その戦いを全面的に支持するものです。

それに対して韓国政府と戒厳軍当局は、その殆んどの勢力をふりむけて光州市を包囲し、市民に対する不当な殺傷や逮捕、拷問をくりかえし、27日にはついに圧倒的な軍事力を投入して全市を制圧してしまいました。

私たちは、市民の声をふみにじり、ただ武力のみによって民衆をねじふせて事態を鎮圧しようとする韓国当局の姿勢を遺憾に思うものです。この姿勢の行きつくところは、民主化を願う民衆の願いに逆行する、ますます強力な軍部独裁体制の継続であることは明らか

自ら傷つきながらも　血だらけの友に　ハンカチをさしのべる女性

です。

また、このような状態の背後には、在韓米軍の協力があると見られる事実がありますし、日本政府もこの事態の解決に対して何ら責任ある発言をしないことを残念に思います。

以上の認識に立って、私たちは、差し当って次のような声明を公けにします。

1、私たちは光州の市民・学生のデモをはじめとする、民主化を求める抵抗運動の正当性を確認し、その戦いを支持します。したがって、日本の教会と民衆がこの事態を対岸の火事視することなく、日本人の責任として、問題の正しい把握と戦う市民・学生に対する支援を送ることを訴えます。

2、韓国政府当局は、光州をはじめとする、全土の市民・学生のデモに対する弾圧を中止し、逮捕者を即時釈放し、かつ、民衆の声に耳を傾けて、戒厳令を撤廃することを求めます。

3、日本政府は、今回の戒厳軍の軍事的介入や暴行を中止させる努力を行い、さらに、金大中氏拉致事件の「政治的決着」を破棄し現状回復の努力を行うことを求めます。

4、アメリカは、韓国の戒厳令態勢に対する協力を即刻中止し、民衆の願いである民主化と統一のための努力を続けることを求めます。

1980年5月27日
日本基督教団総会議長　後宮俊夫

日本基督教団日韓連帯特別委員会

狙撃した遺体をひきずって
運ぶ空てい隊(5月27日)

44

後手に（5月27日）

並べられた遺体　まだ生命のある者まで…写真(右)(5月27日)

三、光州における事態の真相を明らかにするため、国際赤十字及び国連の人権委員会並びにローマ教皇庁に対してその実態調査団の派遣を要請する。

四、光州の善良なる学生、市民の平和的示威行動に対して二個師団の特戦降下部隊の殺りく集団の派遣とその移動を認めた米国政府の責任は免れるものではない。

国家の安全保障はなかんずく国民全体の安全のためにあるのであって、一部の政治権力者のためにあるものではないことを明らかにする。

特にキリスト教国である筈の米国の猛省を促し、韓国政府並びに全斗煥保安司令官に対して韓国国民が納得し得る然るべき具体的措置を取るべきである。我々は韓国と米国との永い歴史的友好関係が、この事件によって誤った方向へ歪められることを深く危惧する。

さらに我々としては、日本政府が米国の態度に追従するばかりか積極的に暴挙を支援するかの如き態度を示していることは、甚だ遺憾に思うと共に歴史の裁きを受けることのないよう根本的に態度を改めるべきであると考え、このことを強く要請するものである。

五、金大中氏、金芝河詩人をはじめ多くのいわゆる良心犯として拘束されている人士全員の即時釈放と、非常戒厳令の即時撤廃、全斗煥保安司令官の全ての公職からの追放と退役を要求し、国家保衛非常対策委員会の即時解散を要求する韓国民衆の立場を全面的に支持する。これらの要求が実現されない時、さらに大きな取返しのつかない不幸を招くであろうことを深く憂うものである。

以上我々は深い祈りを込めて、今回の韓国における事態について人道的見地から我々の見解と声明をここに明らかにするものである。

一九八〇年六月五日

日本カトリック正義と平和協議会

会長　森田宗一

米国も責任を免れることはできない

日本カトリック団体の声明

日本カトリック正義と平和協議会は五日声明を発表し、光州事件に関する戒厳当局の発表は疑わしいとして、国連などに真相解明のための調査団派遣を要請した。声明の全文はつぎのとおりである。

我々は隣国の韓国における人権抑圧に対して深い憂慮と関心を示し、七九年十月二十六日の事態後の民主化の実現に期待と希望を抱いて来た。しかるに緊急措置の撤廃があったにもかかわらず、金芝河詩人をはじめ多くの在日韓国人政治犯が拘束されたままで、むしろ民主化に逆行する傾向を示し、崔体制に対しては維新残党政権と呼ばれる等極めて憂慮すべき事態となって来たのである。

今回の光州事態は、そもそも全斗煥保安司令官が中央情報部長代理に就任したことによってその発端があったことはまことに残念なことであった。ここにそのことを再確認する。

光州事態の生々しい真実の声に接し、この事実を全世界に公表し、一日も早く韓国の地に民主化が実現されることを願い次のように声明する。

一、今回の光州事態発生の責任は、全て全斗煥保安司令官の中央情報部長代理就任によって、軍の政治不介入の約束が踏みにじられたことによる。

二、光州の青少年学生、市民、労働者を無差別に虐殺したことが、今や天下に明白な事実として立証された。

全斗煥殺りく特戦隊に抵抗して戦った光州の青少年学生、全市民こそ、永遠の民主化を願って国を愛し、民族を愛するものの義挙であることを我々は固く信じ、敬意を表し、その犠牲になって倒れた人びとに深く哀悼の意を表するものである。そして今後光州の学生、市民を暴徒呼ばわりすることは許されないことを固く信じる。

道庁前に並べられた犠牲者の棺　このときその数107体
〝恨〟をいだき黄泉に旅立つ場合，韓国では棺を荒なわでくくる（5月24日）

負傷者をタンカーで病院に運ぶ（5月21日）

犠牲者の棺を前に遺族たちの悲しみはつきない（5月24日）

"慟哭"（5月24日）

◇経過日誌◇

【5月18日】　闘争は全南大生500人の街頭デモがきっかけとなった。

光州では2日前の16日、5・16軍事クーデターに反発する4万人規模のデモが繰り広げられたが、これに参加した全南大生は翌日から学内でろう城に入った。18日の全土戒厳令宣布後、機動隊がろう城の学生を排除にかかり、とめに入った教授が重傷を負わされた。怒った学生たちは弾圧を恐れず街頭に進出していった。これが発火点となったのである。

午前10時頃だ。

「戒厳令を解除せよ」などと叫ぶ学生たちに市民が合流、デモ隊は5千人となって機動隊と厳しく衝突、警察署1ヵ所を襲撃した。

夕方、戒厳当局は精鋭といわれる空挺部隊を投入、激しい弾圧を加え、デモ隊側に多数の負傷者を出した。戒厳司令部は同日から光州一円の通行禁止時間を午後9時までと、3時間くり上げた。

【5月19日】　午前中、全南大生、朝鮮大生など500人が中心部でデモ。戒厳軍（1個旅団＝約3千人）と投石戦。戒厳軍は銃剣でデモ隊を突き刺しながら弾圧、非公式報道では死者が数十人に達した。

学生が刺し殺された仲間の死体をリヤカーで運ぶのを見た市民たちは、「なぜ殺す」「武器を持たない学生を殺した」と叫びながら軍隊の流血弾圧に怒りを燃やし、次次にデモの群れに飛びこんで行った。

午後には、市立光州高校など3校の学生約千人、中央女子高校生約2千人が授業を拒否して合流、デモ群集は一般市民も含めて5万人に膨れ上った。

市民たちはスコップや棒、かま

などを持ち、投石、火炎びんなどで空挺部隊と激しく衝突をくり返した。デモ隊は政府機関に投石する一方、当局のいいなりになってデモ批判をしているとして文化放送（ＭＢＣ）、キリスト教放送（ＣＢＳ）、「東亜日報」の各支部を襲撃した。

軍隊はヘリコプターも動員して弾圧にあたったが、夜になってもデモ隊が裏通りに出没しながら軍隊を襲撃、ゲリラ・デモを展開した。市民の支持を受けるデモ隊は、裏通りでは銃を持った軍隊とは力関係を逆転させていたのである。

【５月20日】 空挺部隊の野蛮な弾圧が市民の不満に油を注ぐ形となって、デモはますます拡大、激しさを増していった。デモ群集は午後に６万、夜には10万人ほどにも及んだ。

戒厳当局はこの日新たに１個師団の軍隊（第31予備師団＝約１万２千人）を増派して弾圧をさらに強めていったが、デモ隊はひるむことなく、口々に「全斗煥を殺せ」「金大中を釈放せよ」と叫びながら、軍に真っ向から立ち向かっていった。

夜になってデモ群集は、鉄パイプ、包丁、ハンマー、びん、石、持てるものはなんでも持って、数十台のタクシー、バスを先頭に、道庁前の軍の阻止線に隊列を組んで突進していった。一進一退が続くなかでデモ隊は市役所、道警察署、光州消防署を一時占拠したほか、ＭＢＣ、ＣＢＳ、それに国営放送のＫＢＳ、「全南日報」社を襲撃、ＫＢＳ、ＭＢＣは焼き打ちにあい、ＭＢＣは全焼した。

通行禁止時間の９時をすぎてもデモはとどまることなく、翌日の未明まで市内のいたるところでゲリラ・デモや市庁前での集結デモが展開された。

深夜、軍隊はとうとう発砲した。銃口が市民に向けられたのかどうかは確認されていないが、軍隊が光州駅を占拠しようとするデモ隊を阻止するために20分間射撃を行ったといわれる。

軍内部もかなり動揺したのか、指揮系統の乱れも伝えられた。この日投入された予備軍部隊の一部が民衆鎮圧を拒否して戒厳軍に武装解除されたといわれる。また、警官の一部も市民と共にデモに加わったことが伝えられている。

光州の闘争の火は全州に飛び火、同市の学生、市民４万人が街頭デモをくり広げた。

【５月21日】 デモは汎市民戦の様相を呈し、軍隊との総力決戦となった。

夜明けと共に集結したデモ群集は20万とも30万ともいわれ、光州市の全人口の３分の１から半分、つまり幼児と老人を除いて動ける者はほとんどすべてが参加した。主婦たちは握り飯の炊き出しを行い、デモ隊に食料品が次々ととどけられた。ガソリン・スタンドではデモ隊が確保した車に燃料を無料で提供した。

戒厳当局はこの日、さらに空挺部隊千人、ソウルから２個旅団の軍隊を増派、徹底弾圧の構えをとった。

午後１時すぎ、道庁前は血戦場となった。機関銃付きの装甲車を先頭に、銃を腰だめにした歩兵が続く。市民も投石でこれに対抗。軍は市民に向けて発砲した。この際、多数の死傷者が出た。

市民の怒りは頂点に達した。

市内あるいは近郊の警察署、郷土予備軍の武器庫から数千丁の銃、弾薬、ダイナマイトを、工場から装甲車を、軍隊のジープ、軍用トラックを次々に奪い武装、「全斗煥を八ツ裂きにしろ」などと叫びながら軍隊と激しい銃撃戦をくり広げた。

軍用車両には制服の女子学生、子どもの姿もみえたという。

日が暮れる頃、軍隊は市内の孤立した一部の個所にとじ込められているのを除いて市内から撤退、市民が光州市を掌握した。

事態を重視した軍部は、李熺性戒厳司令官を現地に急派、午後７時ごろ警告文を発表した後、１万人の兵力で市中心部の奪回を図ったが、全南大付属病院の屋上に市民が設置した機関銃などの応射にあい、失敗に終った。

市内には「最後の１人、最後の一刻までの恨み多い全斗煥と戦おう」と徹底抗戦を呼びかける、「民主守護総決起文」がまかれた。

反戒厳闘争は全羅南道の木浦、羅州、和順、長城、栄山浦、霊岩などへと波及した。特に木浦では３万人のデモ隊が中央警察署を襲撃、また日本との合弁企業「湖南ゴム」も襲撃された。

【５月22日】 光州市内は軍隊もなく、平穏なうちに10万人が道庁前で集会を開いた。

当局の発表によれば、反戒厳闘争はこの日までに全羅南道の16市、郡に飛び火、木浦では市民が市内を掌握した。

光州市では流血を避けるために市民側と戒厳当局との交渉が開始された。

【５月23日】 市民、学生たちは戒厳解除の要求を政府が受け入れるまで徹底抗戦の構えで臨んでいる。５万人の群集が市内をデモ。これに先立ち道庁前で５千人が犠牲者の遺体（133人を確認）を前に抗戦の決意を新たにした。

市民と軍部の交渉が続けられたが、軍部はその一方で夜、特殊部隊を市内に潜入させ20数人を射殺したという。

【５月24日】 戒厳軍は重火器を動員して光州の包囲網をジリジリと狭めているが、市民側もバリケードを築いて阻止線を張り対峙、散発的な銃撃戦が起こった。

道庁前には３万人の市民が集まり全斗煥中将の人形の火刑式を行った。

【５月25日】 戒厳軍、光州市への包囲網を狭め市街地に通じる道路の最初のバリケードまで約２㎞の地点まで迫る。同夜、戒厳司令部は、強い調子の警告文を発表するとともに、戒厳軍現地司令部は、ラジオ放送を通じ、近く軍事行動をとると言明する。新しく全羅南道副知事を委員長とする「全道民収拾対策委員会」が発足。

【５月26日】 戒厳軍、午前11時半に中心部に向け戦車を先頭に一時、市内に進入。光州市と他の都市を結ぶ通信回線は、朝から完全に途絶える。午前10時すぎから道庁前で３万名の参加のもとに市民決起大会が開かる。「全道民収拾対策委員会」代表11人、戒厳軍地区司令部を訪れ①崔圭夏大統領は今回の事態について誤りを認め公開謝罪せよ②被害補償を行い報復処分をするな③光州事件を「義挙」と規定せよ―の３つを要求して話し合う。尹潽善氏らの「民主主義と民族統一のための国民連合」は、午前、声明を発表し「この事態は全斗煥中央情報部部長代理の政権欲と維新残党が引き起こした国難」であるとして当局を激しく非難するとともに、「なぜアメリカは全斗煥を支援して、無実の良民を殺傷させるのか」と強くアメリカを非難した。

【５月27日】 同日未明、戒厳軍、戦車を先頭に一斉に市内に突入。武装学生らは英雄的に応戦したが、圧倒的に優勢な戒厳軍の武力により野蛮的に弾圧さる。政府当局、「国家保衛非常対策委員会」設置を決定。事実上の軍政に入る。

また長く暗く、苦しい闘争の時代に入る。

光州虐殺事件を告発する
1980年６月20日印刷
1980年６月20日発行
発行所　**光州虐殺事件を告発する会**
東京都文京区白山４－33－14

¥500-

光州虐殺事件を告発する会